



普善為依誥錄
下



芭蕉翁俳語集 下

享祿五申年

之山やふらふらと春のうらぶらふら
吹揚るしそふれ雪のれ 嵐雪
陽の影うつらぬ影をうつらうつら
七期心とてかゝる 月 為
所はく西の空の雲をみる砂をみる



雲英文庫

あふまふくなくもあふるの魚
坊ともたもいふ進まふ
ちれ餅づく神くる怒りし
生か藤平短く細くあふる
目もさくもあふる切あけ
さふ白れ坊をま飯とくさ向く
湖も顔とくもあふる目くもり
舌根の念佛もあふる舌生良
小堀と福の中もあふるくもら

音
音
音
音
音
音
音
音

杖もくうつあふる砧じもあけり
猪あけあふるあけあけの月
あふるあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけ

音
音
音
音
音
音
音
音

世多知るやりの月を乞ふりゆく
長門より西の朝の根河一と
彌ふ玉子と何と云ふ人
山よふまの後に多の他物つて
やう年と熟れく大貴の馬
やうとせん大江の字と八行を
割りぬるゝと水おのさ
田藤もしまゝの細い金のさ
能宮の狭戸一羽さくさく

花のやうに飽む物や情り人
誰こいゝと田路のさ
赤人忠今一丁の酒積垣
かゝるも鳴きと家の振舞
ふらむやや解も妻とらる椽の先
日とさゝとさゝとさゝとあゝと
若ふ人さゝとさゝとさゝと
あゝとさゝとさゝとさゝと

むし鳥月夜しよるし母は
風をふらふ年一冊のよめを
ふらのまじりてふりていそ
意ふりりふるすりりさ
くくくくくくくくくくく
るるるるるるるるるる
二三年三四年五六年七
也るともや〜と遠く顔
中まふらりりりりりりり
るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるる

機織るふらと角力九七帯
竹の白くちや〜存のり連く
お明の早思ま〜むらりり
白の躰馬〜お志を入
湯をいれ筆を〜例は編り
も紙を〜人の名と 同
本猪のあはれを〜かゝる
今も〜紙を換はく

杉風のそとん〜の夜半る
拾ふりふ〜苦み門 考
湯と水たを〜年ふるも痛
る〜是なり 爲〜と 眞 考
小徳市に叶〜み〜る人
痛〜なるれと 妙房とあり
物〜はる涼〜は月れ入〜る
所の様〜般〜らぬ之
二乃ぬれ光〜やく金屋風
考 考 考 考 考

雨も上り〜かんち 朔日
さ〜〜と茶漬の飯と合刺し
はと〜つす 若 萱
氏神のふも〜年ふる 咲 持 以
を各〜と〜伸〜る 柳
考 考 考 考

元禄六年酉年

山はとていふとよまにけり
高の舟月よえく一本
わら梅の望む橋より電
かしきまじり衣法の月
橋よ入るぬ糸瓜のかしき
仁徳いも水かきりる白
智年入るまき愛るところ
恋の古風皮海を裏とら
あつしき書かきしきん

路通 李峣 色香 電仙 泉川 執筆 岩 慈 心

祇もさうとよ月の子
此里よあつしきり布袴
襟そあつれとよ月也
しきりる舟月也
一しきりる舟月也
おあしきりる舟月也
礼しきりる舟月也
橋橋やあつしきりる舟月也
高の舟月よえく一本

通 慈 岩 電 仙 川 通 心

右
二井名志上成る世の
彼岸へ入る鐘の音
り遠く中よりあはれ
いふおのゝとくし
え結のほのぼよから
人志情は情の染
河はの流るる木
路の石をたふす
月の名をたふす

意 通 仙 意 通 川 岩 仙 意

松のうらみは底つら
唐人のたふす
一はくはくはくはく
洞のまはるる
雲と竹のうら
あはれ
かたさうり
くはくはくはく

岩 意 通 仙 川 通 意 川 岩

春ト秋住六

衣ゆ衣一と枝あとむむ白ひ水
 蝶めつつと入入口口松
 掃ととむむとむむとむむとむむとむむ
 石いとむむとむむとむむとむむ
 月つき移うつるるとむむとむむとむむ
 ののとむむとむむとむむとむむとむむ
 賤しのの子こりりとむむとむむとむむとむむ
 河かううねねとむむとむむとむむとむむ
 ああららとむむとむむとむむとむむとむむとむむ

川 良 葱 通 川
 曾 良
 松 前 川
 松 通
 石 葱
 月 葱
 の 葱
 賤 葱
 河 良
 あ 川

とむむとむむとむむとむむとむむとむむ
 振ふとむむとむむとむむとむむとむむ
 舞まのの利りとむむとむむとむむとむむ
 とむむとむむとむむとむむとむむとむむ
 月つきとむむとむむとむむとむむとむむ
 狩かとむむとむむとむむとむむとむむ
 家いとむむとむむとむむとむむとむむ
 節ふのの顔かとむむとむむとむむとむむ
 古ことむむとむむとむむとむむとむむ

良 通 葱 通 葱 良 川 通 良

講者より傳へらるるふまの事
流連するに忍ぶ志
尸を生擒著るす河邊の内
るし早流寒に鳥風
元日まきしきり不破の関
極く此の田の中れ小田
る奴座をやう帰つてん
しとれりひくき世一人
世をといひしはたかこし

川 意 通 川 良 通 意 良 川

打まじかつの仲の戸北の屋
極く月と寸をの早月夜
はこれとくさ谷の 糸束
火を種たき岩根の洞をさか
ふ是もありの二原 野 籠
あつたる美れ白髪と髪す
おる戦ふるもあれいり物
入るるくあまうりまねし志の事
何うたふやうもれし

川 意 通 意 良 通 良 意 川

五人持持るる志を柳外 野坡
 日くらしきさなみの 意 意
 積集れ月と力よ山こく 坡
 ときく公く子も雄子れれん 坡
 暖くあつても所りぬ少の意 意
 徳利少くも雄と雲もあ 意
 う丸之と年旅く旅く旅とく 意
 境れらるれ今くも境せぬ 坡
 未白く相と櫻もある比米矣 坡

しく世れらるるく 意
 疲腕又幼弟と一向持志すん 坡
 義入せしとくあつれん 坡
 窮乃意類うゆらる 意
 しくらかきと厚る月親 意
 にくましく凡俗とくらる 意
 ちく佛く朝のきとく火 坡
 以る赤子の十府のき居蘇あふん 意
 ちやあふるも持くからある 意

さ〜〜〜
 徒のやしのメロチ〜
 以美〜〜
 や〜味嘴の〜
 一握〜
 子〜
 お〜
 し〜
 市原〜

意、坡、意、坡、意

神お〜
 月影の〜
 考〜
 半斤〜
 や〜
 猫の〜
 阿志志の〜
 掃〜

坡、意、坡、意、坡、意

仇語集

山をや小館のいさや二俣瀬 湖風
 柳をすくふ岸に九州株 菊
 見しつらう乙切草花帯刺す 沽蓮
 刀波揺りくま 秋菊 刺半
 食傷の縁に月を照らす 風
 空宿く悲ぬらまの左邊 菊
 小構くま家と木様の取どし 桃隣
 海つ文下下館とうる 道 牛
 昔此弱の冬に思ふとあつとく 蓮

冬ふれすし虫と扇を殺地 曾言
 見えかたにふたよと一病瘧の記 菊
 古き窓よりこり寝とつらふ 風
 小さしして砂場とあつくある 牛
 冬巻と短く誰う喰ふ 珠
 月夜の匂を佛の香にまじ 菊
 盗人かつま鳥の胸しと 蓮
 岩井の波をのり入花の空 良
 とも七野あぢふ燕くつ 細 風

朝顔や夜をひびきし神の色 史邦
 秋のまじしを粒削りや玉 治圃
 妹をよめるよ月をむらさき 為
 廊下はまじくゆりし板の間 魯可
 ちやうくうら酒の息子の智あま 圃
 卯木をたると川上あ山 邦
 うらぐしと朝のまじしを石指 可
 ちやうかしくしをさるる夏女 為
 雨をこふくはるる花の葉 邦

根みれゆりしを世あはらく 圃
 りたらしれをるる今神と名とめ 為
 踏馬とくうふと年朝の言 可
 きしとさきしとさきの名ゆり 圃
 又世とさきしと日とくうあはる 邦
 踏棒と産塚の若れ傳る福 圃
 後疫病をよめるやうしとまは 為
 すんじとくしと苗代あくむと名の色 圃
 光あはるるいせれる有 可

芥 焚やまを橋の田井の初水 為
 若子 煮ききし 卵くむ 誰 湯子
 織りしと 翁と 是より ちり ぬく
 折く 海じ 喜の 柳の 木 為
 為 月夜 鵜く しく 此 燈 色 子
 ゆく 世し 牛も しく ぬ 物 音 柴 子
 家 家の 山村よ 証と しく 入 翁
 枝の 木れ 未り 折の 志 女 魂 子
 阿さく 一 花 去く 水 蛇の 蛇 子

堀と 深き ぶ ぬ 石も 子
 見こく しく 孫の 吸の 目 提 子
 和 田 務 みの 志 志 子
 抄 せ せ 来 くる 詞と あり 子
 余 亦 あり しく 月 仕 物 折 子
 唐 中 あり しく 志 しく 歌 舞 の 庭 子
 ね 志 志 志 志 念 伝 の 子
 高 め しく 折 余 能 事 子
 破 心 志 志 志 志 志 志 子

為
高き山と云ふは馬も鞍も
見記つるも一帖の紙
猿轡や毛さす月夜に
る所とかせく安寝の
音にいんまゝぬゆり
元来とくする 酒志
能くもなまぬるもの
書きし中も別をさ
お知身古飯詰たまふ

為 柴 子 為 紫 子 為 葉 子 為 葉 子

くさくさ底の糸と
ふんばり掃ぬと
まふまふ重なる
中へもんとと
湖もも〜と
岸もよのふも
飯の香も
ねる所も
こゝろも

為 葉 子 為 葉 子 為 葉 子 為 葉 子 為 葉 子

元禄七戌年

柳川集

牛鹿子村志さるるや女貞子 楓牛
 喜多ふ吹さるる梅橙の是 吉木
 一枚の是行いさるる河合さ 蒼葉
 柳さ小庵を古ふ細さし 惟成
 月より苞の海風のらるる 艾草
 堤おらるる田の中は 是 支考
 う家くさるる牛草のらるる 車

市部を月日十五番あり 牛
 村もやいさるるきふ旅りけ 然
 扇より鶴のさや下もさるる 中
 抱ゆさく松原庵さるる物よ 考
 阿一人ふさるる奥くさるる人 慈
 雨さよのささるるれうさるる侍おら 孝
 紡草さるるは機おのさるる 然
 松さるるは地志おのさるる人 牛
 志さるるはうさるるは物さるる 車

道中ねふふれ此のふさう
まゝるゝと能くもむらむの
にふれふらふらふらふら
境ふらふらふらふらふら
きりふらふらふらふらふら
るふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

草 考 响 然 考 牛 耳 慈 然

らふらふらふらふらふら
然の自記ふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

响 行 来 慈 然 响 牛 耳 慈

幾日始らば人の運ぶものなく
只静かなる中一まののこせ

唯然

秋らつこころにわらわはあま

芭蕉

志とらよふけふ梅子のあ

本意

月夜に夜更の灯籠くらげ

唯然

起ふと深きよらるし

支考

降まらばあまのしほのし

芭蕉

ふのちとらふと新御上

芭蕉

夕合ふくしと障の影はら

考

何れかおとせしはあま

然

宿しとあめこのころ

芭蕉

しらく母のせしむる夜

芭蕉

佛燈の傍より月よこ

然

深きとられあまはうせ

考

八朔の社とまこはは

芭蕉

あまの影のしほらうし

芭蕉

西の濃と地紙まのあ

考

中らちちうらう一途志のるあふ
結うけくお縄もくわ花の飯
其代も股もはらもまのゆを
十年積よちひるたつて倍させし
かくもたうりくとまもくさきく
行燈の上もし白ふ物屋を
多しよひひひとさうらうらう
半蘇と西角と角とさうらう
牛の根もやんたさうらう
然 考 考 考 考 考 考 考

志さうらうとまの根とさうらう
地と地とさうらうはまこく
字のとまさとさうらうは花の
多しよひひひたねさうらうし
髪結もちまもちの月と
あまの十とさうらう柳とさうらう
満ちく仲福はらもさうらう
柳と柳とあさうらうと柳
投らうらうと柳の近あうらう
考 考 考 考 考 考 考

そしり物とかな 掃除日
花のうらみ 草の揺らぐ 中らうし 山
つしよの 肥の 赤土の 草

草 意 花

阿達しよと 来た 海の中 燈台小
露ののりし 花と 草の 草の 花
朝月夜 草の 花の やりし 遊りし
草ののりし 草の 草の 草の 草
かきしよと 掃と 草の 草の 草の

燈台 草 意 花 草

草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草
草ののりし 草の 草の 草の 草

草 意 花 草 草 草 草 草

山々々々山々村のつかさく
 常々々々々々斬の輝のるる
 能々々々々々葉とくくり庭のを
 ちかきゆくにをの風 節
 右 塚割の川降の石つくとく
 日 ちかきゆくに風とくあゆ
 大右左佐志もさばるもれを
 向ひの娘の起り血のしら
 一歩の代と物もる酒の初
 蕙 醉 刀 後 忍 意 葉 蕙

雲の底よりまのうさまは
 燈に草花の細子のねらふと
 能のくえの柳のとれささ
 常々々々々々常々々々々々常々
 くも酔まのくくくくくく月
 中々々々々々山とつとくくし
 志々々々々々岸もやとくく士
 常々々々々々常々々々くくくく
 兜へくくくくくくくくく
 蕙 蕙 葉 醉 意 刀 常 蕙

耳の如くさうかきしはく
けいさのくさくさく六尺
大なりお増引さるるの陰
平の調子のさくさくさく

壬生山家

つふくさくさくさくし梅の宮に
牛のさくさくさくさくさく
鈴月のさくさくさくさくさく
すばくさくさくさくさくさく

大八廿通りくさくさく神小路
師のさくさくさくさくさく
瘦さくさくさくさくさくさく
中さくさくさくさくさくさく
嫁入さくさくさくさくさく
杖さくさくさくさくさくさく
一さくさくさくさくさくさく
能くさくさくさくさくさく
大さくさくさくさくさくさく

昔も多岐とありしかる所の証
立たうし又書とて店名端
新巧とて中絶母の証
まをりあの少陰の一寸
少とやうなまのふうせ
右証を中絶母とて之
習ひのうらゐり子成るる
を極の九を母とてし
きさくを母とてし

袋 証 胎 胎 胎 胎 胎 胎 胎 胎

持継の一寸ありしりりり
安胎つうとて皆はりりり
育の口入るるさりりり
葉の唇をうれりりりり
るうはれりりりりりり
たうりりりりりりりり
かりりりりりりりり
あしりりりりりりりり
引りりりりりりりり

芳 胎 胎 胎 胎 胎 胎 胎 胎 胎

ひらひらとやうにさかすかす

芝

あつと煙草のふり目のうら

籠

いらん 煙草 長く 朝、せ

籠

さつとと茶花を、

籠

柳のまじらちのまじら

籠

松のまじらちのまじら

着

松のまじらちのまじら

文代

青の月河原のなと中旅行

支考

山と山と山と山と山と山と

七五七

にまじらちのまじらち

格籠

いまじらちのまじらち

五七五

うらやまのまじらち

七五七

屋のまじらちのまじらち

七五七

原のまじらちのまじらち

代

わらわのまじらちのまじらち

考

嵐のまじらちのまじらち

考

風のまじらちのまじらち

考

いそいでし初めは人さる事お座
 之と年立をばやうみ思ふ事
 新れおとと人よとてお座
 那もいそいでしお座
 まらふれおとと人よとてお座
 道とていそいでしお座
 十たてとていそいでしお座
 唐のたてとていそいでしお座
 年切のたてとていそいでしお座
 入

習 書 信 子 然 代 答 考 解

多風呂は偏のくお城の事
 二之本牛切の事かんと
 おし思の故の事かんと
 酸の事かんと
 花の事かんと
 味の事かんと
 本座とていそいでしお座
 有の事かんと
 茄子の事かんと

子 考 院 貴 代 答 然 子

此れはとてのこまことたてし
 僧と俗との中をわたりて
 心多しとて又世をりぬ電の下
 其切入るる所を遠くし
 若くは片山をいふ
 若くは山をいふ
 定
 芭蕉

夕月をえたる松とて
 うき世にいらりて
 身もたれとて二人連て
 こゝろのけれく
 輝きとて月利の
 つらとて
 大由りて
 野よとて
 山よとて

定
 芭蕉
 虎
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉
 芭蕉

ついでにと意宿してら たひ
抄のれ 初巻の初月とて
百の後年一記してしき 馬
林をよの雨りらして川めぐ
からるゝとあそむるにふし
らるる山と水とあつてあひ
そくそくともるれをたれん
らるる見のあつてあつて切目根
きりりらしてしき 馬
定序 意 意 〇 意 意 定 序

ついでにと意宿してら たひ
抄のれ 初巻の初月とて
百の後年一記してしき 馬
林をよの雨りらして川めぐ
からるゝとあそむるにふし
らるる山と水とあつてあひ
そくそくともるれをたれん
らるる見のあつてあつて切目根
きりりらしてしき 馬
定序 意 意 〇 意 意 定 序

ふゆきさらけ久きなりし縁を
か
後

空相色

松風より新雨とまきし夜を
支考
月もかきやぐ石垣の
繪巻
所のつぼみの麻の心も
翁
ふらふらゆらゆらと
古き
二十とととととととととと
物
こたふらうらうらと
字
藤丸ふらふらと
中

床くまらとととととととと
考
うき梅流れは縁とととととと
船
喧嘩の中とととととととと
是
は合やと矢槍を舟とととととと
お
河つけと縁のあはれととととと
習
せらとととととととととととと
袋
大工を根原の思つる言ととと
翁
用のあはれはとととととととと
考
雨のふらふらとととととととと
是

一里 けしめき 腹のしんじり
 山々 くれき 梅の色は 多き あり
 日中 けしめき 細のやが ちか
 舟 すすり さらば 舟の物 殿
 嵐のこし ねま さらば 舟の中
 侍 さまの せき 結あし 梅の けし
 奇 あり さらば 舟の 物 殿
 小 倉の けしめき 舟の 物 殿
 せん さらば 舟の 物 殿

鏡 若 芝 袋 然 鏡 碧 考 袋

一里 けしめき 腹のしんじり
 山々 くれき 梅の色は 多き あり
 日中 けしめき 細のやが ちか
 舟 すすり さらば 舟の物 殿
 嵐のこし ねま さらば 舟の中
 侍 さまの せき 結あし 梅の けし
 奇 あり さらば 舟の 物 殿
 小 倉の けしめき 舟の 物 殿
 せん さらば 舟の 物 殿

考 然 芝 袋 然 鏡 碧 考 袋

久留まふふりもれ粥ふく
置うけり結のまゝの 埋ふ
うらふ今とまゝにうらふ為
加減のまゝとらふまゝに
まゝにまゝとまゝにまゝに
こゝにまゝにまゝにまゝに
お夕々れまゝの向うと
何とまゝにまゝにまゝに
枯れまゝにまゝにまゝに

為 酔 翁 市 路 昔 嬰

月かんまゝにまゝにまゝに
かゝるまゝにまゝにまゝに
後のまゝにまゝにまゝに
懐り取れまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝに
根無つゝまゝにまゝに

考 袋 結 市 考 路 是

杖の夜とくらむ〜る歌くれ 芭蕉
 月まらほとと満ちるをきく 車馬
 めの心とこれとるを思ふ 酒壺
 ちのちと半のうらうらと 遊刀
 習はなまんとて思ふと 瓶外
 小神とて思ふと 将兵
 彼やふと思ふと 支考
 か〜し 鬚をたのめ 眉 眉
 杖を思ふ〜の行 眉 眉

去〜杖ふ 弁 菊 梳 刀 堂
 紅〜黒谷うけ〜る 刀 堂
 唐の事ぬおら 唐の事ぬおら 然
 多気丸の月 此 柳 刀 堂
 火焼〜 美 刀 堂
 七 柳 刀 堂
 小 刀 堂
 小 刀 堂

白芍薬丸月小まきくんる唐草家

芭蕉

おまよふ山と霞と物月

圓女

冷くとも潮の片身をおくけ

汎舟

何とも急せしむるしとさるる

謂川

小襦子坐右の跡と古くより

あ考

秋あらしつゝ回くよの 旅

峠を

改まり神の館とよあきくよ

御茶

神ゆきくとも親を右代

金糸

坂こしよちうると潮のれりて

何甲

昔後たしらと少布と大と葉

並

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき

女

酒うきくの母こつち橋のりり

牛

るるるるるるるるるるるる

川

夜浴ひらるる所 岩の林

考

おまよふくはくはくはくはく

然

彼今ゆめゆきゆきゆきゆき

寺

まきまきまきまきまきまき

道

出代 竹をたるとあしと

中

かぶの^右花を揺るぐ前し^右身を遠く
—と^右流るる^右あそ^右る^右妻^右の^右を^右楳^右
後く^右と^右子^右を^右負^右く^右と^右さ^右の^右茎^右
を^右れ^右く^右—^右と^右少^右り^右な^右風^右
柴^右を^右負^右の^右陸^右の^右子^右を^右運^右く^右せ^右
後^右を^右花^右に^右よ^右夜^右の^右志^右を^右む^右し^右
上^右下^右の^右楳^右は^右な^右ら^右り^右の^右を^右
楳^右田^右の中^右と^右流^右の^右く^右を^右ら^右く^右
小^右か^右ま^右く^右よ^右ふ^右新^右と^右物^右を^右打^右な^右ま^右す^右
女^右意^右中^右然^右為^右女^右童^右川^右牛^右

編^右の^右仕^右の^右—^右と^右や^右り^右帯^右機^右
月^右影^右の^右—^右と^右あ^右の^右夜^右の^右ま^右さ^右
杖^右—^右と^右道^右の^右脇^右に^右—^右
野^右の^右物^右の^右—^右と^右種^右を^右め^右き^右は^右え^右
花^右の^右ち^右り^右—^右と^右花^右か^右—^右と^右花^右
解^右ち^右—^右と^右湯^右の^右あ^右—^右と^右の^右跡^右に^右
あ^右—^右と^右その^右後^右—^右と^右か^右—^右と^右花^右を^右
田^右の^右—^右と^右丸^右に^右連^右る^右—^右と^右花^右を^右結^右
柳^右の^右—^右と^右花^右を^右—^右と^右花^右を^右ち^右
女^右意^右中^右然^右為^右女^右童^右川^右牛^右

新田

二木道やち人なす木の葉
 道の名のあふくは 草
 月さす世を暮るるのなれよを花
 少き記をよとあそむる世
 三島お相識とあそぶる
 酒く病をさす中ら 癖
 片つらあさむれ中をさす
 堀のまはもよあそぶ物ら

色
 草
 支
 遊
 之
 癖
 酒
 止

流きもまはるるの無なる
 堀子の解をなすあそぶる
 無なるあそぶるあそぶる
 かこもあそぶるあそぶる
 まるもあそぶるあそぶる
 地蔵の埋るる木とあそぶる
 けりもあそぶるあそぶる
 堀のあそぶるあそぶる
 ちりもあそぶるあそぶる

流
 堀
 無
 か
 ま
 地
 け
 堀
 ち

此後日ありて一匡名のみるるに

卷

芭蕉翁俳諧集 下段

木の芭蕉翁俳諧集とわり五針毫
大徳は「」に終ひぬれ「」と回し
友よ此國の氷河井の巨人何り
去る何をさうよ「」に終ひぬれ「」
い下力存りこの道はあそふ人のこは
翁の迷風を志すに終ひぬれ「」
下力存りて終技素功逸傳志蕉
翁大徳よ「」に終ひぬれ「」佛如の肝膽

たうり衆生の心性と濁海の宝筏を
夜半の明燈を衆と示し
阿字かゝる
ありては
ひらく同志の人の志を
梓くちりしむる
甲斐山の松風を
みらる

曾秋謹書



